様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２５日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：２１５２０３０２
研究課題名（和文）英国ルネサンス期における宴会形式の社会的文化的特徴の考察
研究課題名（英文）Social and Cultural Aspects of Banqueting Practices in Renaissance England
研究代表者
山本　真司（YAMAMOTO SHINJI）
天理大学・国際学部・講師
研究者番号：８０４３４９７６

研究成果の概要（和文）：
本研究では、英国ルネサンス期における宴会形式の社会的文化的特徴を分析した。
宴会の実践が、詩や演劇といった文学的表現だけでなく、音楽、舞踏、狩猟、料理などの文化的社会的実践にどのような影響を与えたかを考察した。
シェイクスピアや同時代の文学作品における宴会の場を理解する際の困難さが、公私の空間の境界線が曖昧であることに起因することを明らかにした。
最後に、エンブレムや植民地主義的言説に視点を広げ、パトロン貴族だけでなく、新興の中産階級の自己形成が当時どのように行われたかを、宴会の実践という場に関連付けて考察した。

研究成果の概要（英文）：
This research elucidated the social and cultural aspects of banqueting practices in Renaissance England.
It examined the impact of banqueting practices on cultural and social activities such as not only poetry and plays but also music, dance, hunting, and cooking.
It concluded that the difficulty in understanding banqueting scenes in Shakespearean works and other English Renaissance literature originated from the complexity of a banqueting space in which the line between the public and the private is blurred.
Finally it also explored emblematic aspects and postcolonial discourses in banqueting practices which served to constitute the identities of not only the aristocratic patrons but also the new middle-classes in early modern England.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：イギリス・ルネサンス・宴会・空間

１．研究開始当初の背景
本研究は、研究代表者が近年主にロンドン大学を拠点とするリサーチによって進めてきた、英国ルネサンス期における宴会形式の社会的文化的特徴に関する研究の延長線上に位置づけることができる。

エリザベス朝において「宴会」を意味する言葉“banquet”には、“feast”（大宴会）という意味の他に“dessert”（甘味デザートのコース料理）という意味も含まれており、当時はちょうどこの二つの意味が分化してい

く過程にあったと考えられる。

研究代表者は、博士論文“Banqueting as a Cultural and Social Practice in Shakespearean Drama”(ロンドン大、2005 年)で、主にシェイクスピアの作品において“banquet”(宴会)の実践が社会的文化的にどのような意味をもっていたかについて詳細に分析している。そして、シェイクスピア劇の“banquet”シーンの詳細な分析を通して、さまざまな文化的社会的言説が交渉する過程を考察した。

新・新歴史主義を提唱する米国の研究者 P・ファマトンは、その先駆的著書『文化の美学』において、“banquet”が後者(デザート)の意味を有するようになっていく過程で当時の貴族の空洞化する主体性を象徴するようになったと論じ、当時流行した仮面劇との関係において“banquet”が“feast”に対して持つ曖昧な関係に着目する必要性を指摘した。

英文学を専門とする研究者は、これまで文学表現を重視するあまり、「バンケット(宴会)」の社会文化的な要素に関してはほとんど考慮に入れることなく、研究対象となった文学作品の該当箇所を他のテキストと相互に比較検討するに留まっていることが多かった。あるいは、祝祭儀礼との関係の文化人類学的なアプローチがほとんどであった。

しかしイギリス近代初期の社会や文化において「宴会」の実践が果たした役割をより深く理解するためには、「食文化」に関する他のさまざまな要素も見逃すことはできないはずであり、文学だけでなく文化や社会の面からのより学際的なアプローチが必要となっていた。

しかも「宴会」の実践においては、文学テクストだけでなく、音楽や絵画やダンス、さらには家庭内の食器や家具などに象徴的な図絵が応用されていたという側面から、エンブレムという象徴的図絵とテクストが融合した応用芸術の重要性も無視することはできない。

このような研究動向を受けて、研究代表者は主に以下の三点について研究を進め、論文を発表していた。

(1) 物質文化の面からシェイクスピアとバンケット(宴会)の関係を概観した上で、主に『ロミオとジュリエット』と『マクベス』に共通する宴会場面の不在表象について、祝祭儀礼の側面より考察し、以下の論考を発表した。“Shakespeare and the Material Culture of Banqueting: Representing the Absent and the Festive Ritual Reversed in *Romeo and Juliet* and *Macbeth*”(『演劇センター紀要 早稲田大学 21 世紀 COE プログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉』VI,2006 年)。

(2)バンケット実践と貴族の家庭の家父長制的役割について、『じゃじゃ馬馴らし』に見られる家政術に注目しながら考察した。この成果は、“Banqueting Practices and the Patriarchal Projects of the Household Economy in *The Taming of the Shrew*”(『演劇博物館グローバル COE 紀要 演劇映像学 2008(第 4 集)』,2009 年)として発表された。

(3) 家父長制の問題が『タイタス・アンドロニカス』の食人的バンケットの場面においてどのように表現されているかについて、消費する母親像と扶養する父親像を対比させながら考察し、以下の論文を発表していた。“Consuming Mother/Nurturing Father-The Art of Cooking in *Titus Andronicus*”(『演劇センター紀要 早稲田大学 21 世紀 COE プログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉』VIII,2007 年)。

２．研究の目的

本研究は、ルネサンス期のイギリスを中心として、宴会という料理形式を通じて多様に交差する社会的文化的実践空間の編成に注目して研究を遂行することを目的としている。

これまで進めてきた研究をさらに深くそして広く発展させるために、ルネサンス期の英国社会の様々な社会階層で実践されていた宴会という料理の諸形態がどのような特徴をもっていたかを分析し、その上で当時の文学や演劇といった文化生産にいかなる影響をもたらしたかを以下の要領で検証する。

(1)本研究では、引き続き英国ルネサンス期“banquet”(宴会)におけるパブリックとプライベートな側面に注目しながら、シェイクスピアの演劇に代表されるような芸術作品だけでなく、近代的なプライバシー獲得に向かう過程にあった貴族から庶民に至る人々の日常生活の変化にまで考察の範囲を広げる。このような過渡期の芸術の特徴の一つでもある曖昧性や異種混淆性をより詳細に分析することにより、より学際的かつ独創的な研究成果を挙げることを目指す。そして、研究の成果は随時、教育の現場にも還元する。

(2)また、これまでは主に文学テクストの“banquet”表象に注目することで、国家主義的なイデオロギーが様々な言説と交渉しながらその曖昧性を分節化していく過程を考察してきたが、本研究では、さらに考察の対象を広げ、その文化的社会的なコンテクストをより明確に提示することを目的とする。

(3)具体的には、シェイクスピアの劇だけで

なく、散文パンフレットやカントリー・ハウスを扱った詩、演劇、仮面劇、エンブレムといった文学的言説から医学、料理、舞踏、牧畜、建築といった文化的、社会的言説まで幅広く扱いながら、“banquet”という一種の文化様式が社会的実践として父権制的な家政学の言説の中に位置付けられていく過程を考察し、“feast”と“banquet”という宴会の二つの料理形式のさらに広範かつ包括的な比較分析を行う。

３．研究の方法

本研究は、四つの方向性を有機的に相互に関連させながら遂行した。それぞれの特徴において比較論的な視座を据えたうえで、英国ルネサンス期の宴会が、貴族の日常的実践としてだけでなく、一国を超えた文化・社会・政治的事象としても発現していたという事実についても明らかにするため、本研究では領域縦断的なアプローチを取った。

まず、英国ルネサンスの宴会を以下の四つの特長によって特徴付け、各トピックについて段階的かつ相互関係的に分析を進めた。

①料理本や家政学書によって記された調理実践としての宴会
②建築構造的な視点から、空間実践としての宴会
③日記や書簡など日常生活のなかでの実践としての宴会
④文学や絵画などの文化表象としての宴会

これまでロンドン大学での調査を中心に進めてきた研究をさらに深くそして広く発展させるために、本研究では、ルネサンス期の英国社会の様々な社会階層で実践されていた宴会という料理の諸形態がどのような特徴をもっていたかを分析し、その上で当時の文学や演劇といった文化生産にいかなる影響をもたらしたかを検証した。

具体的な研究方法に関しては、年度ごとに以下のような方法により研究を遂行した。

(1)平成２１（２００９）年度

まず、英国における調査対象①「料理本や家政学書によって記された調理実践としての宴会」を中心に、ロンドン大学図書館、大英図書館、ロンドン大学ウォーバーグ研究所などにおいて資料を収集した。同時に、英国カントリー・ハウスや公文書館において、「宴会」に関するレシピ本、手紙などの一次資料を収集し、バンケットルーム等を広く調査・分析することによって、「ジェンダー、ナショナリティへの意識の高まり」が宴会の社会的文化的実践においてどのような意味を持っていたかを研究した。

ロンドンの貴族の屋敷における宴会形式に関連し、詩や装飾に使用されたエンブレムについて、本研究に関連して連携を始めたエンブレム協会にて研究発表を行った。

また、勤務校の学生を、本研究と関わりのある英国の城館に引率するなどして、広く異文化教育を実践し、その成果を報告にまとめた。

(2)平成２２（２０１０）年度

本年度も昨年度に引き続いて、英国における調査の対象①及び、②「建築構造的な視点から、空間実践としての宴会」を中心に、ロンドン大学図書館、大英図書館、ロンドン大学ウォーバーグ研究所、そしてさらに、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、大英博物館にて資料を収集した。

本研究の一部である英国の宴会に使われる装飾的エンブレムの紹介などを、高大連携の一環で地域の高校の異文化理解教育に組み入れ、その教育的実践の成果を学会で発表した。

シェイクスピアの悲劇『リア王』の宴会と悪魔払いをめぐる象徴的意味を中心に、テクスト批評と文化批評の観点から考察し、論文に発表した。また、歴史劇『ヘンリー４世』における宴会の祝祭と身体論について論文にまとめた。

(3)平成２３（２０１１）年度

本年度も、昨年度までの英国における調査対象①、②に引き続き、③「日記や書簡など日常生活のなかでの実践としての宴会」、④「文学や絵画などの文化表象としての宴会」に関しての研究資料調査を実施した。また、昨年度から着手しているバンケットという宴会空間とエンブレム表象との関係についての資料収集を継続し、英国ルネサンスにおけるバンケットの文化的歴史的背景をさらに詳細に調査研究した。

英国ルネサンスのバンケットに使われるトレンチャー（木皿）に描かれた図絵をエンブレムの視点から考察し、国際学会で発表した。同発表原稿はその後国際エンブレム協会の学会誌『エンブレマティカ』に投稿され、査読の結果掲載が決まり現在校正中である。

また、エリザベス朝のカントリー・ハウス文化を特徴づけている家政術やバンケット（＝デザートコース)、仮面劇といった文化的要素を詳細に分析することにより、当時広く流布しつつあった新世界をめぐる植民地主義的言説が、シェイクスピア後期のロマンス劇である『テンペスト』という作品のバンケット表象にどのような影響を与えているかを考察し、その成果を論文に発表した。

本論文では、特に貴族的な古い価値観から新しい階級労働者的価値観への変化が、『テンペスト』とその宴会表象にどのように反映しているかについて論じ、さらに仮面劇やバンケット表象と私的空間への志向性やその創造、それにジェンダーに関わる社会的な問題の関係について検討を加えた。

学会での発表や調査、研究会において国内外の研究者と連携し、また英国や日本の図書館で資料調査を行うことにより、ルネサンス期英国の宴会と当時の社会文化との関係を明らかにした。

４．研究成果

(1)本研究調査の成果に基づいた異文化理解教育・地域社会への貢献

本研究を進めるにあたって、英国における現地調査・研究資料の収集をする過程でデジタル撮影機器による写真・ビデオ撮影は不可欠であるが、異文化や外国語を理解する上でいかに写真やビデオ映像が役立つかということに関して、現地における実地調査や研究で得た知見に基づきながら教育雑誌にその実践方法論として残した（雑誌論文④)。

また、本研究で得られた英国ルネサンス宴会文化やエンブレムの成り立ちを、高大連携事業を通して地域の高校生に伝えることで、彼らにさらに国際理解への興味と理解を深めてもらうことを目的とし、そのような教育の理論と実践について教育学会にて発表し、成果の一部を地域社会に還元した（学会発表②)。

(2)シェイクスピア作品を中心としたバンケット表象

本研究における「宴会」とは、英語では“feast”と“banquet”の両方を指す。ただし、“feast”と“banquet”の両方の意味を含むとはいえ、その関係性の定義は複雑である。仮に前者を主に中世風の豪華な饗宴として理解するならば、後者は饗宴の途中あるいは最後に供されたデザートのコースということになる。

しかし、このような料理形態の基本的な相違に基づく文化表象の特徴は、従来の文芸批評的分析・研究ではほとんど注目されなかった。学者たちの間では、ルネサンス期の英国では“feast”と“banquet”が多くの場合同じような意味で用いられていたと考えることが通例であった。実際にこの二つの料理文化はルネサンス以降にははっきりと異なる美学様式としてさらに発展していくため、慣例としては別物として取り扱う傾向にあった。

シェイクスピアの作品は、“banquet”がデザートコースとして一連の宴会から分化していく過程に注目するためには最適な資料である。しかし、文学資料中心の研究では、その複雑な社会的文化的関係性を浮き彫りにするためには不十分であった。研究代表者の博士論文は、その曖昧な関係性の分析に焦点を当てたものであった。しかしながら、それらの多くは、いまだ伝統的な演劇論の枠内に留まるか、あるいは、料理文化史以上のものではなかった。これに対して、本研究は博士論文で理論化した“feast”と“banquet”の関係性の分析に基づき、これらの日常的実践が空間的文化生産の場としてどのような構造を提供したかを解明することに主眼を置いた。これによって、ルネサンス期の英国で急速に発展した“banquet”という食文化様式が、どのような実践空間を生産・再生産するのに貢献したかを解明するという独自の視点を提示できた。

英国ルネサンス期の料理本は数多くの宴会料理のメニューやレシピを記載している。注目すべきは、グローバル化時代の黎明期におけるジェンダーとナショナリティへの意識の高揚である。「英国の主婦」像の確立とプロの男性調理人の地位確立が同時進行しているという事実は、宴会料理のレシピを広く収集・分析することと、当時のジェンダー、ナショナリティへの意識の高まりの密接な関係性を示している。

本研究では、これまで進めてきた研究をさらに深くそして広く発展させるために、ルネサンス期の英国社会の様々な社会階層で実践されていた宴会という料理の諸形態がどのような特徴をもっていたかを分析し、その上で当時の文学や演劇といった文化生産にいかなる影響をもたらしたかを検証した。特に、バンケットという宴会空間とエンブレム表象との関係に注目し、1600年前後におけるバンケットの文化的歴史的背景を詳細に調査研究した。

天理大学の紀要論文として発表した「偽りの悪魔払い―Ｑ１『リア王』における無の劇場」では、これまで扱っていなかったシェイクスピアの悲劇作品においてバンケット空間だけでなく、エンブレム表象のエッセンスとも言える「無」と「演劇性」の関係について主にテクスト批評と文化批評の視座から考察した（雑誌論文③)。本論文は、シェイクスピアの四大悲劇のひとつである『リア王』という劇作品について、第一クオート（Ｑ１）テクストを用いながら、その重要な主題の一つである「悪魔払い」と、それに関連した「無の劇場性」について考察した。まず①「悪魔払いと劇場的無」では、「無」の劇場性との関係から「悪魔払い」の言説を分析し、②「偽りの（あるいは人為的とか疑似といってもいいかもしれないが）悪魔払い」では、悪魔払いの人為性・疑似性の表象が、有名な

ドーバー・シーン（芝居後半で、エドガーが父親であるグロスターに偽の悪魔払いをして、自殺願望を遠ざける場面）に代表的にみられるような「創造的無」という特性と関連づけられた。

1980 年代以降、シェイクスピアのテクスト（本文）研究は著しい成果を挙げており、特に『リア王』批評においては、1608 年に出版されたＱ１テクストと、1623 年に出版されたフォリオテクスト（Ｆ）を、それぞれ独立したテクストと見なすことが研究者の間ではほぼ認められている。本稿のテクスト分析は、Ｑ１とＦ『リア王』のパラレルテクストに基づいたものであり、主にＱ１テクストを扱いながらもＦテクストとの相違にも目配りをする手法は最近の傾向でもある。

『リア王』における悪魔払いの主題は、新歴史主義の旗手であるグリーンブラットの歴史的考察が有名であり、その後たびたび様々な批評家によって取り上げられているが、本稿のように「無」の劇場性の主題との関連でＱ１テクストに基づいて論じられたことはまだない。また、悪魔払いと変装の主題については、基本的宴会などでも活躍するエドガーを中心に論じられているが、さらに他の登場人物、たとえばリア自身、道化やリアの娘たち、それにエドマンドやケントなどが舞台に繰り広げる、様々なレベルでのいわゆる「演技」と絡めて広く論じることができれば、本稿で展開する「無」の劇場性についても、さらに深く理解することができたかもしれない。いわゆるドーバー・シーンにおける「偽りの（あるいは疑似）悪魔払い」こそが、Ｑ１『リア王』における「無の劇場」のクライマックスとも通底音ともなる主題であることを明らかにした。

演劇映像の国際的教育研究拠点である早稲田大学演劇博物館のグローバル COE プログラムの紀要に発表した論文「エイジャックス、あるいはトイレの衛生化―『ヘンリー４世』におけるフォルスタッフの祝祭の場と身体の統治」では、シェイクスピアの『ヘンリー４世』における宴会表象を分析することにより、祝祭空間においてプライバシーと身体感覚がどのように結び付けられているかを考察した。（雑誌論文②）

この論文では、『ヘンリー４世』における宴会（フィーストとバンケット）のさまざまな文化表象を考察し、フォルスタッフのグロテスクな身体をめぐって私的・公的空間の境界線がどのように構成されているかを明らかにした。まず、カーニバルの象徴としてだけでなくグロテスクな身体をも表すフォルスタッフ表象について考察し、初期近代の衛生概念と私的空間の関係を、同時代の作家サー・ジョン・ハリントンの作品『エイジャックスの変身』の分析により明らかにし、フォルスタッフの祝祭的な宴会の場（居酒屋ボアズ・ヘッド亭）における私的空間と公的空間の境界の曖昧化について考察した。そして、プリビー＝トイレを巡る文化・空間表象を背景として、ハリントンの（エイ）ジャック＝トイレの比喩を出発点に、ジャック・フォルスタッフとハリントンの類似性を指摘した後、身体統治の言説によってフォルスタッフの祝祭空間を矯正・衛生化しようとするハル王子＝ヘンリー５世の政治的意図を浮かび上がらせた。

(3)エンブレムと植民地主義の視点からみたバンケット表象

ルネサンス期の英国社会で実践されていた宴会という料理の諸形態と当時の文化や社会との関係への考察をエンブレムと植民地主義の側面から深めた。

まず、英国ルネサンス期の宴会においてエンブレムがどのように用いられているかに注目し、主にバンケット（デザート）用木皿に描かれたエンブレムやエンブレム的図絵と、それに付随する警句詩の分析を通して、エンブレムの（食文化や装飾文化を含む）物質文化的背景を考察した。また、他の木皿の例も取り上げ、エンブレムやエンブレム的意匠が当時の王侯貴族の生活文化で果たしていた役割の一端を明らかにした。

その研究の成果の一部を、日本エンブレム協会例会において「詩人サー・ジョン・デイヴィスとエンブレム」として発表し（学会発表③）、また、エンブレム研究の拠点グラスゴー大学開催の国際エンブレム学会世界大会において、「英国ルネサンス文化と社会におけるバンケット木皿とエンブレムの伝統」として発表した（学会発表①）。本発表では、エンブレムが英国ルネサンス期の宴会においてどのように用いられているかに注目し、主にバンケット（デザート）用木皿に描かれたエンブレムやエンブレム的図絵と、それに付随する警句詩の分析を通して、エンブレムの（食文化や装飾文化を含む）物質文化的背景を考察した。サー・ジョン・デイヴィスが1600年にトマス・サックヴィルの新年会の催しのために書いた余興詩「世界の１２不思議」は、ジョン・メイナードによって1608年にリュート用にメロディーをつけて出版され、1620年頃にはデザート用円盤木皿に描かれている。この木皿が当時どのように使用されたかを理解するために、メイナードのパトロン貴族が所有するロングリート・ハウスに刻まれた当時のバンケット実践の名残を考察した。また、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館や大英博物館に多く残されている他の木皿も取り上げ、すでにマイケル・バースの先行研究を援用しながら、アルチャートのエンブレ

ム以外にどのようなエンブレム的図絵や意匠がバンケット木皿に多く利用されているか分析するとともに、サー・ジョン・デイヴィスの他の詩作品とその文化的社会的背景を考察することにより、エンブレムやエンブレム的意匠が当時の王侯貴族の生活文化で果たしていた役割の一端を明らかにした。

早稲田大学演劇博物館のグローバルCOEプログラムの紀要に発表した論文「植民地支配の家政術：英国カントリー・ハウス文化と『テンペスト』におけるプロスペローの魔法のバンケット」は、エリザベス朝のカントリー・ハウス文化を特徴づけている家政術やバンケット（＝デザートコース）、仮面劇といった文化的要素を詳細に分析することにより、当時広く流布しつつあった新世界をめぐる植民地主義的言説が、シェイクスピア後期のロマンス劇である『テンペスト』という作品のバンケット表象にどのような影響を与えているかを考察した（雑誌論文①）。また、スペンサーやシドニー、ベン・ジョンソンといった詩人たちによって書かれたカントリー・ハウスを主題とした詩における植民地主義に関係した用語やレトリックの分析を通して、芝居の主人公であるプロスペローの孤島における絶対的支配権と植民地主義的家政術の関係を明らかにし、国家の境界をめぐる当時の人々の不安感などを背景に、貴族的な古い価値観から新しい階級労働者的価値観への変化が、『テンペスト』という植民地主義に深く関わる劇にどのように反映しているかについて論じた。そして最後に、『テンペスト』の仮面劇とバンケット表象に関して、私的空間への志向性やその創造、それにジェンダーに関わる社会的な問題がどのような意味を有しているかということについて検討を加えた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①Shinji Yamamoto. “The Art of Colonial Husbandry: English Country-house Culture and Prospero’s Magic Banquet in *The Tempest*”、演劇博物館　グローバルCOE紀要 演劇映像学2011、査読無、5号、2012、pp.123-48

②Shinji Yamamoto. “Sanitizing Ajax, or the ‘Privy’：Falstaff’s Festive Space and the Government of the Body in *Henry IV*”、演劇博物館　グローバル COE 演劇映像学2010、査読無、5号、2011、pp.35-59

③Shinji Yamamoto. “Artificial Exorcism: The Theatre of Nothing in *Q1 King Lear*”、天理大学学報、査読有、62 号、2011、pp.33-49

④山本真司、「実践報告：ビデオを活用した外国語・異文化理解教育-英国における天理大学海外文化実習の事例を中心に-」『外国語教育-理論と実践』第36号、査読有、天理大学言語教育研究センター、2010、pp.37-51

〔学会発表〕（計３件）

①Shinji Yamamoto、“Banqueting Trenchers and the Emblematic Tradition in English Renaissance Culture and Society”, The Society for Emblem Studies, Glasgow conference, 2011年6月30日, グラスゴー大学, 連合王国

②山本　真司、吉川　佳靖、井上 昭洋「高大連携の取り組みから-国際理解を取り入れた英語教育-」、関西英語教育学会 (KELES) 2011年1月29日、天理大学

③山本　真司、「詩人 Sir John Davies とエンブレム」、日本エンブレム協会（第4回）例会、2010年3月24日、 成城大学

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　真司（YAMAMOTO SHINJI）
天理大学・国際学部・准教授
研究者番号：８０４３４９７６